

夏目漱石『それから』論

——「自然の昔に帰る」代助の生き方を中心に——

具 賢 淑

一

夏目漱石の作品には、「自然」という言葉がよく使われている。それは、ある一つの作品に限られているのではなく、初期から晩年の作品に至るまで、「自然」の概念が用いられている。「自然」あるいは「天」の成り行きに従う生き方を何よりも重んずる漱石は、自分の人生観をそのまま作品に表そうとしたのだと思われる。「自然」の成り行きに従い、素直に生きようとする漱石の「自然観」が、はっきりと描かれている作品は「それから」である。漱石は、「それから」の執筆中、相当の苦勞を重ねたようである。それは、漱石の明治四十二年八月九日の、「それから」を書き直したのは是で「返目也」という日記の文面からも窺うことができる。漱石が「返」も書き直しながら描きたかった、「それから」における「自然」とは、何であろうか。そして、その「自然」は、「愛」とどのように結びついていくのであろうか。

二

代助は、上流世界の知識人で、学校を卒業して三十歳になっても遊民として、何の仕事もせず、父から経済的援助を受けて、趣味に任せた生活を楽しんでいる。代助には、平岡という友人がいる。二人は中学時代からの知り合いで、学校を卒業した後も、本当の兄弟の様に親しく往来した。又、二人の学友に菅沼という人がある。平岡は、学校を卒業して一年後、菅沼の妹（三千代）と結婚し、東京を發つて京阪地方に移った。

しかし、平岡夫婦は、偶然東京へ戻ってきた。「それから」には、殆ど忘れていた昔の思い出が、偶然な出来事とともに蘇って、「世間の掟」(十六の八、三三六頁)と「自然の事実」(同前)の間で気持ち揺れ動きながら、「自然の事実」に自分の運命を性せていこうとする代助の生き方が描かれている。

代助は、平岡が三千代を愛する前から、三千代に対する戀情を抱き始めていた。しかし友達への「義侠心」(十六の八、三三六頁)

から、三千代と平岡の結婚を周旋した。しかし、そのような仕方
で「自然の愛」(十六の八、三二六頁)に逆らった代助は、後に
手痛い刑罰を蒙らざるを得なかった。

代助に与えられた刑罰とは、「自然に復讐」(十六の九、三三〇頁)
を取られたことといえる。それ故、数多くの細君の候補者に接し
ながら、三十過ぎまで独身で暮らさざるを得なかったのは、「自
然の復讐」であると考えられよう。「自然の復讐」は、三千代が
結婚して、東京を去った後も、代助の三千代への恋情を捨てさせ
る訳にはいかなかった。

明治四十二年一月より六・七月頃までの『日記及断片』に見ら
れるように、漱石は、『それから』を書くに際して、全体の構成
をかなり精密に組み立てた。そのうち、次のメモは看過できない
と思う。

4 平岡ト三千代ハ結婚ヲ誤マツタ。⁽³⁾

漱石は、利害のはさまらない純粹な出会いによって行われる結
婚を、何より大切にしたい。これに対して、平岡と三千代との結婚
は、誠の「愛」の結晶としての結婚とは言いがたい。明治四十
三年四月、「白樺」創刊号の巻頭に発表された武者小路実篤の「そ
れから」に就て「は、三千代に対する平岡と代助の「愛」を次の
ように分けている。

平岡の戀は自然派の云ふ戀である。情欲八分の戀である。代
助の三千代に対する戀は八分愛である。⁽⁴⁾

平岡の「細君が病氣になつた為に遊びたくなるやうな戀」(同前)
は、純粹に沸いてくる誠実な愛よりは、動物的・本能的な「愛」
といつて良からう。

では、平岡に対する三千代の「愛」は、どういふものだろうか。
結婚して三年後、「餐の存在には貴方が必要だ。何うしても必要
だ」(十四の十、二七九頁)という代助の「愛」の告白に、三千
代は涙ぐみながら、「打ち開けて下さらなくつても可いから、何故」
(十四の十、二八〇頁)、「何故棄て、仕舞つたんです」(同前)
と責める。とすると、あの時、三千代は代助を愛していたのでは
なからうか。元より、平岡に対する三千代の誠実な「愛」は、存
在していなかったのではなからうか。

それ故、平岡と三千代が「結婚ヲ誤マツタ」といふのは、「自
然の事実として成り上がった夫婦関係」(十六の八、三二六頁)
ではなかったということである。つまり、「平岡は貰ふべからざ
る人を貰ひ、三千代は嫁ぐ可からざる人に嫁いだ」(十三の四、
二二三頁)という意味である。

三

偶然なきつかけによつて辭つてきた、代助の三千代に向かう「自
然の愛」は、我知らず心の奥深いところに据えられてしまった。
代助は段々深まっていくなかに三千代への恋情を感じざるを得なかつた
のである。しかし、「別段不徳義とは感じなかつた。寧ろ愉快な

心持がした」。そして、「代助は心の中で痛く自分が平岡の依頼に
応じて、三千代を彼の爲に周旋した事を後悔した」(十三の四、
三三三頁)。

考えがここまで至って、

彼は自分と三千代との關係を、直線的に自然の命する通り発
展させるか、又は全然其反対に出て、何も知らぬ昔に返るか。

(十三の九、二四九頁)

と、戸惑い始めた。つまり、

自然の坭にならうか、又意志の人にならうか。(十四の一、

二五〇頁)

と、迷わざるを得なかつたのである。代助にとつて、三千代との
關係を「自然の命する通り發展させる」ことは、おのずから沸い
てくる三年前の純粹な「自然の愛」を守ることであり、「天意に
叶う」(十三の九、二四九頁) ことである。

一方、人妻への「愛」を「自然の命する通り發展させる」とい
うのは、「人の掟に背く」ことであり、結局、「社会的に罪を犯し
たも同じ事」(十四の十、二八一頁) である。「自然」の成り行き
に逆らつたがために、「自然に復讐^{かた}」を取られつゝあつた代助は、
「然し僕はさう生れて来た人間なのだから、罪を犯す方が僕には
自然なのです」(十四の十、二八一頁) と言わざるを得なかつた。
偽りを脱いだ、代助の「自然の愛」は、「自然の昔」(十四の七、
二七一頁) に帰って、初めて「安慰」を感じ、平和や自由を感じ

ることができた。つまり、我知らずおのずから沸いてくる、純粹
な慈心を大切にして、心の導くまま素直に従つて、初めて故郷に
いるような安らぎを感じることができたのである。

しかし、「自然の愛」に従うことを決心した代助は、「自己が自
己に自然な因果を發展させながら、其因果の重みを背中に負つて、
高い絶壁の端迄押し出された様な心持ち」(十六の一、三〇一頁)
を感じなければならなかつた。つまり、「天意には叶ふが、人の
掟に背く」代助の「自然の愛」は、これを守りつづけるために、「世
間の掟」と衝突しなければならなかつたのである。

さらに、代助は三千代に対する「物質上の責任」(十六の三、
三〇八頁) を負わなければならなかつた。「金に不自由しない様
であつて、其実大いに不自由してゐる」代助は、「少なくとも自分
一人前ぢやない。半人前にもなれない」(十六の三、三〇七頁)
のである。

武者小路実篤は「それから」に就て、「社会の掟」と「自
然の命」の間で戸惑い、「自然の愛」に則る代助に対して、「一種
の自然崇拜と見たい」と述べた。さらに、

自然の命に背くものは内に慰安を得ず、社会に背くものは物
質的に慰安を得ない。人は自然の命に従はなければならぬ。
しかし社会の掟にそむくものは滅亡する。さうして多くの場
合、自然に従ふものは社会から外面的に迫害され、社会に従
ふものは自然から内面的に迫害される、人の子はどうしたら

い、のだらう。中途半端にぶらついてゐるより外仕方がない。

(四一九頁)

と、言い加えている。

しかし、「天ノ與ヘタ偶然」な出来事を大切にして、「自然の児」になる決心をした代助を、「中途半端にぶらついてゐる」と言い切つて良いだらうか。「自然の愛」を握つたかわりに、「金剛石を放り出して、馬鈴薯に嚙り付かなければならない」(十三の一、二二五頁) 状況に陥つた生活や、父・兄・嫂・平岡はいうまでもなく、「世間の掟」と戦わなければならない衝突は、代助にとっては大変なことといえるだらう。と言つて、「自然の昔に帰る」代助の「自然の愛」を、悲劇だと言えるだらうか。

筆者は、「夏目漱石の『非人情』」で、「明暗」における漱石の「自然」の分け方について述べた。そこで論じたように、漱石は「自然」を「大きな自然」と「小さい自然」に分けている。この観点から『それから』における「自然に帰る」を考察するならば、どのようになるだらうか。

「自然を以て人間の抱えた凡ての計画よりも偉大なものと信じてゐた」(十三の一、二二四頁)と言へる代助において、「大きな自然」に辿りつくとともに起こる物質的な問題や、「世間の掟」との衝突などは、人間の成長過程にたとえてみると、これから乗り越えなければならない「思春期」の出来事といえよう。

それ故、「自然の昔に帰る」にもかかわらず、患はされる代助

の「自然の愛」は、岡崎義恵が『藝術論の探求』で論じたように、「天(或は自然)に還らんとする者の苦行の道」、あるいは「則天去私の道程における一つの過渡的状态を示すもの」(二七九頁)と考えることができる。又、これは「大きな自然」の中での成り行きを「小さい自然」に調和させようとするよりは、むしろ、「小さい自然」で起こる様々な出来事を「大きな自然」の成り行きに従わせようとする、漱石の「自然観」に基づく思想であるとも考えられる。

四

ここで、「自然の昔に帰る」代助の心境を、漱石がロンドン留学中に見出した、「自己本位」と結びつけて考えてみると、どのようなになるだらうか。

梶木剛は『夏目漱石論』において、「自然の昔に帰る」代助を漱石の「自己本位」に繋げて、かなり詳しく述べている。そのうち、次のような論述に注意したい。

梶木剛は、漱石の「自己本位」を、「生活原理」としての「自己本位」と、「思想原理」としての「自己本位」に分けて論じた。そして、朝日新聞に入社して、本格的に創作活動をし始めたことに對して、「自己本位」の原理に従つた必然的な帰結」と述べた。又、「自己本位」の思想原理はここではまだ漱石の生活原理にとどまつていて、作品の構成を統率する思想原理そのものとしては

定着されていない」(一二—一四頁)と書き加えた。

そして、

代助の胸の中に結実した「今日始めて昔に帰るんだ」という命題は、いいかえれば、代助がここに「自己本位」の四字を掌握したということに外ならない。(中略)つまり漱石はこの「それから」一篇で、これまでは生活原理としてあった「自己本位」を、思想原理そのものとして作品的構成の中心に持ちこみ、主人公長井代助とともにその思想を行きはじめるのだが、そこで、注目すべきは、代助の「自己本位」が、みられるように、おのれの内部の「自然」に従うものという形で具体化されている点である。(一五頁)

と述べている。

様々な障害にもかかわらず、「自然の愛」を求めようとする代助の行動には、漱石のロンドン留学中に見出した「自己本位」が現れているといえる。といって、「自然の昔に帰る」代助の生き方を、「自己本位」の四字を掌握したということに外ならない」と断言できるのであろうか。

漱石は、『それから』の四年後に発表した「私の個人主義」で、「自己本位」について詳しく述べた。ここで、「私の個人主義」に述べられている漱石の「自己本位」と、「自然の昔に帰る」といった代助の行動とを、厳密に検討する必要がある。

大学で英文学を専攻した漱石は、絶えず学問的な葛藤や物足り

なさを感じた。漱石は、このような不安を抱いて、大学を卒業し、松山・熊本へ移り、ロンドンへ留学に行った。しかし、このような漱石の行動は、自分の意志でしたというよりは、他人に勧められて行なわれた、「根のない萍のやうに、其所いらをでたらめに漂つてゐた」⁽¹³⁾「私の個人主義」⁽¹⁴⁾「他人本位」(同前)に過ぎなかった。漱石のいう「他人本位」とは、「自分の酒を人に飲んで貰つて、後から其品評を聴いて、それを理が非でもさうだとして仕舞ふ所謂人真似」(同前)を意味する。

英文学を専攻していながら、自分の見識よりは、西洋人の意見に左右されざるを得なかった漱石は、「文学は何んなものであるか、その概念を根本的に自力で作るより外に、私を救ふ途はないのだと悟つた」(同前)。ロンドンの霧の中で、又、学問的な不安で霧のように霞んでいた精神状態の中で、漱石がやっと悟つたのが「自己本位」である。

漱石の「自己本位」とは、「自己が主で、他は賓であるといふ信念」(同前、五九七頁)である。これは、「自己中心」と同様に見えるかも知れない。しかし、それはむしろ、様々な束縛や拘りがある「小さい自然」を乗り越えた、「禪」の世界でいう「自己を忘れたる絶対の境地」⁽¹⁵⁾での確固たる自己信念である。さらに、それは「洒落超脱ノ趣」⁽¹⁶⁾(明治三十四年三月十二日、日記)や、「笑而不答心自閑ト云フ趣」(同前)がある「大きな自然」の世界での生き方であるといえよう。

結語

「今日始めて自然の昔に帰るんだ」と胸の中で云つた⁽¹⁶⁾（それから十四の七、二七一頁）代助は、「年頃にない安慰を終身に覺えた」（同前）。そして、「純一無雜に平和な生命を見出した」（同前）。そこには、「雲の様な自由と、水の如き自然とがあつた」（同前）。しかし、代助は「自己が自己に自然な因果を發展させながら、其因果の重みを背中に負つて、高い絶壁の端迄押し出された様な心持ち」を感じなければならなかつた。つまり、「それから」予告に示したように、「此主人公は最後に、妙な運命に陥る」のである。これに対する最後の描写は、注目に値する。

忽ち赤い郵便筒が眼に付いた。すると其赤い色が忽ち代助の頭の中に飛び込んで、くるくると回転し始めた。（中略）仕舞には世の中が真赤になつた。さうして、代助の頭を中心としてくるりくると焰の息を吹いて回転した。⁽¹⁸⁾（それから

十七の三、三四三頁）

代助の「妙な運命」の「因果の重み」は、三千代に対する「物質上の責任」といつて差支えない。代助は、「自然の愛」のため、今までの生活とは變つて、否応なく仕事を探さなければならぬ。又、父・兄・嫂・平岡はいうまでもなく、「個人の自由と情実を毫も斟酌^{しんさく}して呉れない器械の様な社会」と戦わなければならない。

「小さい自然」の旋に拘つて、友人に対する「義侠心」を襲つて振る舞つた代助の行爲は「他人本位」と言い得るだろう。いつて、「自然の昔に帰る」代助の行動を、掘木剛のように「自己本位」の四字を掌握したということに外ならない」と断言してよいのであろうか。

「自己本位」には、生涯漱石の憶れていた「洒落超脱ノ趣」や、「笑而不答心自閑ト云フ趣」があるはずである。そこには、「雲の様な自由と、水の如き自然」とが存在するはずである。にもかかわらず、「自然の昔に帰る」代助に、「物質上の責任」や「個人の自由と情実を毫も斟酌して呉れない器械の様な社会」との戦いがもたらされるというのは、代助がすでに「自己本位」の四字を掌握したというよりは、「他人本位」から離れて「自己本位」へ向かいつつある道程にあつたのだと言えるだろう。つまり、作品「それから」は、「自然」に従う生き方をめぐる、漱石の探求の發展途上に位置づけられる。

「小さい自然」から「大きな自然」の「自己本位」へ向かう道程には、様々な障害や衝突が潜在しているだろう。しかし、この苦難の段階を通過し、超越してこそ、確固たる自分の信念を貫くことができる。そこに、「自己本位」に基づく人生が確立するといえよう。このように、「自己本位」への道程を乗り越えて、「大

きな自然」に辿りつこうとする代助の生き方に、「自然」の成り行きに従う事を重んずる漱石の基本的な生き方を窺うことができるのである。

注

- 1 新刊『漱石全集』第二十巻 日記・断片 下 岩波書店 一九六六年 六七頁。
- 2 新刊『漱石全集』第六巻 それから・門 岩波書店 一九九四年。
- 3 1に同じ。九五頁。
- 4 『武者小路実篤全集』第一巻 小学館 昭和六十二年 三三一頁。
- 5 2に同じ。
- 6 4に同じ。
- 7 1に同じ。
- 8 2に同じ。
- 9 「岡山大学大学院文化科学研究科紀要」創刊号一九九五年 一九三頁。
- 10 2に同じ。
- 11 岡崎義恵「藝術論の探求」弘文堂書房 昭和十六年 三五九頁。
- 12 梶木剛「夏目漱石論」勁草書房 昭和五十一年 一三頁。
- 13 新刊『漱石全集』第十六巻 評論ほか 岩波書店 一九九五年 五九三頁。
- 14 中川荏援「揮毫字彙」柏林社書店 昭和十年 三一頁。
- 15 新刊『漱石全集』第十九巻 日記・断片 上 岩波書店 一九九五年 六四頁。
- 16 2に同じ。
- 17 13に同じ。二八五頁。
- 18 2に同じ。

(グ ヒヨンスク 忠南大学非常勤講師)

「岡大國文論稿」第二十七号(平成十一年三月発行) 要目

論文

高橋虫麻呂の方法―旋頭歌と短歌……………錦織 浩文

「風草紙」論―森島中良の体制批判……………石上 敏

與謝野晶子の古典研究―「紫式部新考」を中心に……………加古美奈子

坪田譲治とキリスト教……………劉 迎

有情の受身文と非情の受身文における格助詞の違い……………劉 迎

「に」、「によって」と「から」を中心に……………林 美秀

森鷗外の漢語―「舞姫」の漢語「坎珂」と「轆轤」……………林 美秀

の語義について……………何 欣泰

特別寄稿……………何 欣泰

「書評」辻星児著『朝鮮語史における「提解新語」』……………片 茂鎮

書評・新刊紹介……………片 茂鎮

金沢裕之著『近代大阪語変遷の研究』……………湯浅 茂雄

大友信一監修 三宅ちぐさ編著『天理大学附属天理園……………湯浅 茂雄

書館蔵 世俗字類抄 影印ならびに研究・索引……………河野 敏宏

大坪併治著『国語史論集下』(大坪併治著作集4)……………江原由美子

大友信一・佐藤武義・木村晟・片山増賢編……………江原由美子

『古辞書抄物 韻府群玉・玉塵抄』……………江口 泰生

太田絃子編著『二葉亭四迷「あひま」の表記研究……………江口 泰生

と本文・索引……………江口 泰生

村上龍著 蔡雅娟訳『村上龍料理小説集』……………何 欣泰

蔡雅娟訳『夢境預言書』……………林 美秀